政 治 研 究 結 果 報 告 書

―政治研究助成―

西暦 2023 年（令和 5 年）02 月 26 日

一般財団法人　櫻　田　會
理事長　　増田　勝彦　殿

研 究 者　法政大学 法学部 教授
上田 知夫

第 40 回（2021 年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。
※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入）　Research Theme

カント主義的プラグマティズムの政治理論：ハーバマスの議論を導き手として

Kantian pragmatist political theories: A Habermasian analysis

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250 words **以内）** Abstract (Purpose, Process, Significance)

Purpose: This research project concerns the notion of rightness (*Richtigkeit*) in Habermas's theory to characterize (1) the notion of practical rationality within Kantian pragmatism, to clarify (2) the originality of Habermas's discussion using the notion of practical rationality as well as to identify (3) essential characteristics required for a political theory in the spirit of Kantian pragmatism.

Process: This project consists of three parts: one is to collect essential first (i.e. Habermas's) and second literature. This part included traveling to Germany and visiting the Bavarian state library. Second, the first results of the research were regularly discussed with my colleagues. Third, the results were presented in a research seminar held at Yamaguchi University. And a paper is now being printed.

Significance: There are three main results. First, Habermasian characterizations on the transcendental question (which every form of Kantianism should give a formulation of and an answer for) are given. Second, Habermas's recent work on religion and naturalism is consistently understood as the process of answering this transcendental question. Third and finally, the Habermasian relationship between truth and rightness (that is to say, that between theoretical and practical reasons) has been sketched out. This includes criticisms against Habermas's own understanding of the relationship.

※研究の目的・研究方法・意義 （和文 600 字以内）

本研究の目的:本研究は、カント主義的プラグマティズムの政治理論をテーマとし、特にハーバマスにおける規範的言明の正当性（Richtigkeit）という概念に着目した。この研究の目的は、3 点あった。(1) カント主義的プラグマティズムの観点で、実践理性を特徴づける。(2) そこで特徴づけられた実践理性の概念を用いて、ハーバマスの議論の独自性を明確にする。(3) 実践理性にかかわるハーバマスの諸概念は、彼の政治理論の基礎である。とりわけ熟議民主主義論に着目し、カント主義的プラグマティストの政治理論が満たすべき理論的条件を探る。

研究手法:本研究は、ハーバマスの論考を一次資料として、またその他の論者の議論を二次資料として用いる文献研究である。

本研究の意義:ハーバマスの理論にとって重要な理論理性（言明の真理）と実践理性（言明の正当性）の間の関係について、カント主義的プラグマティズムを擁護するようになった 1990 年代以降のハーバマスは両者の分析の同型性を拒否するようになった。本研究の意義は、ハーバマスの議論に反対し、真理と正当性はカント主義的プラグマティズムの枠組みとの内でも依然としてパラレルに分析できることを示すところに研究の一義的意義がある。本研究はさらに派生的に、ハーバマスが擁護するカント主義的プラグマティズムの政治哲学を探る端緒となることが期待されている。

※研究経過と結果の概要　（以下の欄に 35 行以内（1500 字程度）にまとめる）

本研究の経過:本研究は文献研究であり、主にハーバマスによって著された諸文献を一次文献として読み解きつつ、その他の文献を二次文献として利用した。これらの諸文献は助成期間を通じて断続的に収集を続け、2023 年 1 月にはドイツ連邦共和国に出張し、バイエルン州立図書館および各種書店において文献収集を行った。助成期間を通じて、収集した文献の検討結果は、定期的に同僚たちと開催している研究会での議論に供してきた。とりわけ助成期間以前から開催しているある研究会では、現在『また哲学の歴史』(2019) を集中的に検討しているが、この研究会では数度にわたり機会を作り、後述の業績につながる萌芽的アイディアについて検討した。これらの検討の結果をまとめたものが、2022 年 8 月には、山口大学で開催された「対話知能学研究会」での口頭発表［業績 2］である。ここでは、会話としての討議が持つ規範性に着目して 1973 年の「真理諸理論」(とりわけのその最後部に現れる)の討議の深化というアイディアが持つ普遍性を検討し、ハーバマスの理論哲学の内でそのアイディアがその後にどのように展開したかを議論した。またカント主義的プラグマティズムが「カント主義」を名乗る以上は回答を与えるべき、超越論的問題設定の定式化にも取り組んだ。その後、本年度の研究をまとめて草稿にし、2022 年 12 月に論文として紀要『法学志林』誌に投稿し、校正作業を経て本年度中に出版されることになっている[業績 1]。

本研究で得られた結果:以上の経過を経て行われたこれまでの研究では、ハーバマスの政治論の基礎をなす討議倫理の基礎概念(すなわち、言明の規範的評価)について検討した。本研究では、助成期間以前からの研究の継続としてハーバマスの真理論に着目した。得られた結果は、3 つに大別される。(1)カント主義的プラグマティズムが回答を与えようとする、一人称複数的な視点における超越論的問題設定についての見通しを得た。(2) 現在ハーバマスが注力している宗教論の中心概念である系譜学およびカント主義的プラグマティズムの一部をなす弱い自

然主義のプロジェクトを一貫したものとして理解し、その上でそれらを超越論的問題設定への回答方法として捉えた。(3) さらに本研究ではハーバマスの言明の規範的評価(正当性)に関わる議論を真理論と関連付けて理解することを目指し、実践理性の議論を明らかにしようとし、暫定的とはいえ真理と正当性の間の分析のパラレリズムを提案した。

今後の課題: 本研究は理論哲学の範囲でハーバマスの政治哲学の基礎にある概念装置を明確にすることに努めた。たしかに討議倫理の基礎概念である正当性概念をある程度明確化し、ハーバマスの宗教論の理論的射程をある程度まで描像することはできたが、未だそれらは理論的考察にとどまる。この研究結果を得て、現在は宗教論とハーバマスの民主主義論との関係についての研究に着手しているところである。現在中心的に検討しているのは『自然主義と宗教の間』第 2 部 (2005) に所収の民主主義論であるが、それと並行して『事実性と妥当性』(1992) および『公共性の新たな構造転換』(2022) の議論を検討しているところである。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等 (あるいは発表の計画や形式等)

論文:

1. 上田知夫.「カント主義的プラグマティズムの超越論的問題設定」.『法学志林』120 (4). 2023 年 3 月刊行予定 (印刷中).

口頭発表:

2. 上田知夫.「正当化の脱中心化と討議の規範性」. 対話知能学研究会(山口大学). 2022 年 8 月口頭発表.

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご留意ください。